

大物主大神と卯の日

『古事記』

中巻

第十段

崇神天皇段

大物主神の神祭りは、神武天皇から数えて十代目の崇神天皇の時代には疎かになつてしまいます。そこで不満を持たれた大物主神は、祟りを起こされます。この天皇の御代に疫病が多くの人に広がって、人々が死んでいなくなつてしまひそうになりました。そこで天皇はご心配になり、またお嘆きになつて、神のお告げを受けるための寢床を作つてお休みになられた夜に大物主神が天皇の夢の中に顕れて「これは私の意志によるものだ。だから意富多多泥古（おおたたねこ）によつて私を祭らせるならば神の力による疫病は起こらず国は安定し穏やかに治まるだろう」とお告げになりました。天皇はすぐさま意富多多泥古を探し出し三輪山で祭祀を行かせたところ天変地異も疫病も収まったそうです。この祭祀が行われたのが崇神天皇八年卯の日なので、それ以来卯の日を神縁の日としてお祭りが行われて来ました。当分祠のうさぎ（卯）は令和五年（卯年）三月（卯月）十日（卯日）十二年に一度の三つの卯が重なる日に併せ奉納されました、とても縁起の良いうさぎさんです。